月(つき)とあざらし

小川未明

北方の海は銀色に凍(こお)っていました。長い冬の間、太陽はめったにそこへは顔を見せなかったのです。なぜなら、太陽は、陰気(いんき)なところは、好かなかったからでありました。そして、海は、ちょうど死んだ魚の眼のようにどんよりと曇(くも)って、毎日雪が降(ふ)っていました。

一疋(ぴき)の親の海豹(あざらし)が、氷山(ひょうざん)のいただきにうずくまって、ぼんやりとあたりを見まわしていました。その海豹は、やさしい心を持った海豹でありました。秋のはじめに、どこへか姿の見えなくなった自分のいとしい子供のことを忘れずに、こうして、毎日あたりを見まわしているのであります。

「どこへ行ったものだろう……今日(きょう)も、まだ姿は見えない。」

海豹はこう思っていたのでありました。寒い風は、しきりなしに吹いていました。子供を失った海豹は、何を見ても悲しくてなりませんでした。その時分は、青かった海の色が、いま銀色になっているのを見ても、また、体(からだ)に降りかかる白雪を見ても、悲しみの心をそそったのであります。

風は、ひゅう、ひゅうと音を立てて吹いていました。海豹はこの風に向かっても、訴(うった)えずにはいられなかったのです。

「どこかで、私のかわいい子供の姿をお見になりませんでしたか。」と、あわれな海豹は、声を曇らしてたずねました。

いままで、傍若無人(ぼうじゃくぶじん)に吹いていた暴風(ぼうふう)は、こう海豹に問いかけられると、ちょっとその叫びをとめました。

「海豹さん、あなたはいなくなった子供のことを思って、毎日そこに、そうしてうずくまっていなさるのですか。私は、なんのためにいつまでも、あなたがじっとしてい

なさるのか分らなかったのです。私はいま雪と戦っているのでした。この海を雪が占領(せんりょう)するか、私が占領するか、ここしばらくは、命がけの競争(きょうそう)をしておるのですよ。さあ、私は、大抵(たいてい)このあたりの海の上は、一通り隈(くま)なく駆(か)けて見たのですが、海豹の子供を見ませんでした。氷の蔭(かげ)にでも隠(かく)れて泣いているのかも知れませんが……こんど、よく注意をして見て来てあげましょう。」

「あなたは御親切な方です。いくらあなた達が、寒く冷たくても私は、ここに我慢(がまん)をして待っていますから、どうか、この海の上を駆(か)けめぐりなさる時に、私の子供が、親を探して泣いていたら、どうか私に知らせて下さい。私はどんなところであろうと、氷の山を飛び越して迎(むか)いに行きますから……。」と、海豹は、眼に涙をためて言いました。風は行く先を急ぎながらも顧(かえり)みて、

「しかし海豹さん。秋頃、漁船(ぎょせん)がこのあたりまで見えましたから、その時人間に捕(と)られたなら、もはや帰りっこはありませんよ。もし、こんど私がよく探して来て見つからなかったら、あきらめなさい。」と、風は言い残して馳(か)けて行きました。

その後で海豹は、悲しそうな声を立てて啼(な)いたのです。

海豹は、毎日風の便りを待っていました。しかし、一度約束をして行った風は、いくら待っても戻っては来なかったのでした。

「あの風はどうしたろう……。」

海豹は、こんどその風のことも気にかけずにはいられませんでした。

後(あと)からも後からも、頻(しき)りなしに風は吹いていました。けれど同じ風が二たび自分を吹くのを海豹は見ませんでした。

「もしもし、あなたはこれからどちらへお行きになるのですか……。」

と、海豹はこの時、自分の前を過ぎる風に向かって問いかけたのです。

「さあ、どこと言うことはできません。仲間が先へ行く後を、私達はついて行くばか

りなのですから……。」と、その風は答えました。

「ずっと先へ行った風に、私は頼(たの)んだことがあるのです。その返事を聞きたいと思っているのですが……。」と海豹は、悲しそうに言いました。

「そんならあなたとお約束した風は、まだ戻(もど)っては来ないのでしょう。私がその風に遇(あ)うか何(ど)うか分らないが、遇ったら言伝(ことづて)をいたしましょう。」と言って、その風も何処(どこ)へとなく、去ってしまいました。

海は、灰色(はいいろ)に静かに眠っていました。そして、雪は風と戦って、砕(くだ)けたり飛んだりしていました。

こうしてじっとしているうちに、海豹はいつであったか、月が自分の体を照(て)らして、「さびしいか。」と言ってくれたことを思い出しました。その時、自分は空を仰いで、

「さびしくて、さびしくて仕方がない！」

と言って、月に訴(うった)えたのでした。

すると、月は物思い顔にじっと自分を見ていたが、その儘(まま)黒い雲のうしろに隠れてしまったことを、海豹は思い出したのであります。

さびしい海豹は毎日毎夜、氷山のいただきにうずくまって、我が子供のことを思い、風のたよりを待ち、また、月のことなどを思っていたのでありました。

月は、決して海豹のことを忘れはしませんでした。太陽が、賑(にぎや)かな街(まち)をながめたり、花の咲く野原を楽しそうに見下ろして、旅をするのとちがって、月は、いつもさびしい町や暗い海を見ながら旅をつづけたのです。そして、あわれな人間の生活の有様や、飢(うえ)に啼(な)いているあわれな獣物(けだもの)などの姿をながめたのであります。

子供をなくした親の海豹が、夜も眠らずに、氷山の上で悲(かなし)みながら吼(ほ)えているのを月がながめた時、この世の中の、沢山(たくさん)な悲(かな)しみに慣れてしまって、さまで

感じなかった月も、心からかわいそうだと思いました。
あまりに、あたりの海は暗く、寒く、海豹の心を楽しませる何もなかったからです。
「さびしいか？」と言って、僅かに月は声をかけてやりましたが、海豹は悲しい胸のうちを、空を仰いで訴えたのでした。
　しかし、月は自分の力で、それを何(ど)うすることもできませんでした。
　其の夜から、月はどうかして、このあわれな海豹をなぐさめてやりたいものと思いました。ある夜、月は灰色の海の上を見下ろしながら、あの海豹は、どうしたであろうと思い、空の路を急ぎつつあったのです。やはり風が寒く、雪は低く氷山を掠(かす)めて飛んでいました。
　果(はた)して哀(あわ)れな海豹は、其の夜も、氷山のいただきにうずくまっていました。
「さびしいか？」と月はやさしくたずねました。
　この前よりも、海豹は幾分痩(や)せて見えました。そして、悲しそうに空を仰いで、
「さびしい！　まだ、私の子供は分りません。」と言って、月に訴えたのであります。
　月は青白い顔で海豹を見ました。その光は、あわれな海豹の体を青白くいろどったのでした。
「私は世の中のどんなところも、見ないところはない。遠い国の面白い話をしてきかせようか？」と、月は海豹に言いました。
　すると海豹は頭を振って、
「どうか、私の子供がどこにいるか、教えて下さい。見つけたら知らしてくれるといって約束した風は、まだ何んとも言ってきてくれません。世界中のことが分るなら、他のことはききたくありませんが、私の子供は、いまどこに何(ど)うしているか教えて下さい。」と、海豹は月に向かって頼みました。
　月はこの言葉をきくと、黙ってしまいました。何といって答えていいか分らなかったからです。それ程、世の中には海豹ばかりでなく、子供をなくしたり、さらわれたり、殺されたり、そのような悲しい事柄が、そこここにあって、一つ一つ覚えてはい

られなかったからでした。

「この北海の上ばかりでも、幾疋(いくひき)の子供をなくした海豹がいるか知れない。しかし、お前は、子供にやさしいから一倍悲しんでいるのだ。そして、私は、それだからお前をかわいそうに思っている。そのうちに、お前を楽(たのし)ませるものを持って来よう……」と月は言って、また雲のうしろに隠れました。

月は海豹にした約束を決して忘れませんでした。ある晩方(ばんがた)、南の方の野原で、若い男や女が、咲き乱(みだ)れた花の中で笛(ふえ)を吹き、太鼓(たいこ)を鳴らして踊(おど)っていました。月は、この有様を空の上から見たのであります。

これ等(ら)の男女は、いずれも牧人(ぼくじん)でした。もうこの地方は暖かで、みんなは畑や田に出て、耕(たが)やさなければなりませんでした。一日野良に出て働いて、夕暮になると、みんなは月の下でこうして踊り、その日の疲(つかれ)を忘(わす)れるのでありました。

男共は牛や羊を追って、月の下の霞んだ道を帰って行きました。女達は花の中で休んでいました。そして、そのうちに、花の香りに酔い、やわらかな風に吹かれて、うとうとと眠ってしまったものもありました。

この時、月は小さな太鼓が、草原の上に投げ出されてあるのを見て、これを、あわれな海豹に持って行ってやろうと思ったのです。

月が手を伸ばして太鼓を拾ったのを、誰も気付きませんでした。その夜、月は太鼓を負って、北の方へ旅をしました。

北の方の海は、依然(いぜん)として銀色(ぎんいろ)に凍(こお)って、寒い風が吹いていました。そして海豹は、氷山の上にうずくまっていました。「さあ約束のものを持って来た。」といって、月は太鼓を海豹に渡してやりました。

海豹は、その太鼓が気に入ったと見えます。月が、しばらく日の経(た)った後に、このあたりの海上を照らした時は、氷が解けはじめて、海豹の鳴らしている太鼓の音が、波の間からきこえました。